

「日本昔話」に登場の観音堂。佐井田城の攻防戦でこの地が焼け野原になり、観音様も盗まれた。お参りしていた老人が、観音様を一心に刻み完成させた。老人がなくなり「身替り観音」としてお祭りしたら、伯耆の根雨から元の芋岡に観音様が戻ったと伝えられる。



佐井田城主「山田駿河守重英」の日常の政務を行う屋敷跡。土居砦は、屋敷の背後に築いた佐井田城の最前線の砦



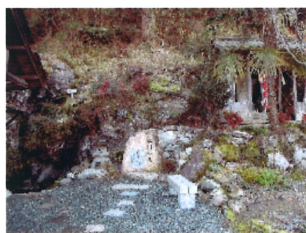
「旧伊勢亀山藩中津井陣屋跡」に設けられた農村型リゾート施設で、和室、洋室の宿泊施設や「陣屋会席」「中津井豆腐会席」等の食事が楽しめる。



明治時代の古民家で、市が寄付を受け、展示や催し物などの交流施設として活用している。



古来からの名泉で、泉の前には地藏堂、右上上段には行者堂があり、各々に菩薩様が祀られている。



悠久の里「北房・中津井」



平安時代より天皇が即位されるときに行われる大嘗祭に献上する米を栽培した地（主基田）と言い伝えられている。

後三条天皇大嘗会のときの和歌
「千年積御代のためしにつきそむる中井のいねの年へたるかな」

「色々におれる錦と見えつる是高機山の紅葉なりけり」(前筑前守五位上藤原朝臣経衡)



建旗山(古来は高機山)は、永禄12年(1569年)毛利元清が佐井田城を兵糧攻めにした際に備前の宇喜多直家に援軍を求めた時に、宇喜多来援の合図に狼煙を上げたのが狼嶺きの「間久保山」で、毛利軍を破り勝利の旗をたてたのがこの山、建旗山である。



天平勝宝(750)の頃に僧「行基」が開創したと言われる真言宗古義御室派(仁和寺)の直末中本寺。



文禄元年(1592)に創建したと言われ
る浄土真宗西本願寺派の末寺。木造
阿弥陀如来像は市指定文化財



貞治2年(1363)に大覚大僧正が創建したと言われる日蓮宗の末寺、山門は伊勢亀山藩中津井陣屋の門を移築している。



延喜 4 年(904)に、中津井から現高梁市、現新見市の一部の氏神として創建されたが火災で焼失、天明 7 年に再建された神社。本殿は三間四面床高で入母屋造り。参道の入口の鳥居は備北一の大きさ。社頭には周囲 8.5m、推定樹齢 800 年の大杉がある。備中松山藩改革に尽力した山田方谷の 4 歳時の奉納板額がある。



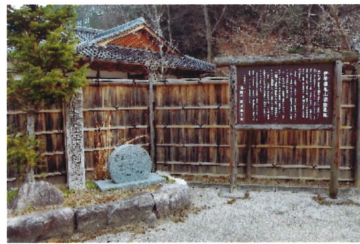
天明4年(1788)に建立された神社。社殿の後ろにある高さ13m、長さ110mの石灰礫岩の岸壁が屏風を立てたように見えることから「屏風岩」と言われている。



室鳩巢は、江戸時代中期に幕府の儒官となり、8代将軍徳川吉宗の享保の改革を進めた儒学者。中津井は、鳩巢の父玄樸の生まれた所で先祖の墓がある。



備中松山藩 6 万 5 千石の藩主であった石川主殿頭松慶が延享元年 (1744) 3 月に伊勢亀山藩 5 万石の藩主板倉勝澄と交代する際に、中津井から現高梁市へかけての 1 万石を亀山藩の飛地領とし、中津井陣屋を設けて代官を派遣し治めた。陣屋は農業や商工業を奨励し栄えたが、明治時代になり廃止された。



下村古墳は、下中津井の東側丘陵頂部にある径 25m、高さ 5m の円墳である。石室は全長 12.3m、幅 2.4m、高さ 2m となっている。石室の様相から 6 世紀の後半と推定されている。



佐井田城址は、佐井田山から東に延伸する尾根上の標高 332mにある。鎌倉時代の初期文治 3 年(1187)に山田重英(備中松山藩煩老山田方谷の遠祖)が築城したといわれ、慶長 5 年(1600)まで 413 年間存続した。天文から弘治、永禄元亀、天正期にかけて雲州の尼子氏、安芸の毛利氏、備前の宇喜多氏による備中攻略の拠点となった。



7世紀後期に築かれた3段の墳丘と前面に2段の基壇をもつ5段築造の方墳という全国的にもあまり例を見ない貴重な古墳と言われている。規模は、東西 22.7m、南北 16.2m、高さは1段目から墳頂まで7.3mとなっている。入口は東南に面し、玄室は奥行 3m、幅 2m、高さ 1.8mで、切石を積み上げて築かれている。埋葬は須恵器の陶棺と木棺の両方で行われている。副葬品として、「金銅装環頭大刀」、儀杖のものと見られる「金銅製品」、鉄斧、須恵器等が出土しており、被葬者は吉備の太宰「石川王」ではないかと言われている。



定古墳群は、「定東塚古墳」から「定西塚古墳」、「定北古墳」、「定4号墳」、「定5号墳」の方墳が丘陵上に連続して築かれている。飛鳥時代の古墳がこのように継続して築造されている例は極めて珍しく、7世紀代の吉備の歴史を考える上で重要である。「定東塚古墳」が最も古く、奥行11.6m、幅2.6mの横穴式の石室となっている。副葬品として「金モール」等の金製品、「方頭大刀」、「鉄鍬」、「馬具」等が出土している。

